

浅井先生のご退職にあたって

小口 菜採・大塚 貞子

浅井幸子先生は、裁判官だった父上の任地により、日本の各地で子供時代を過ごされました。中でも中学・高校時代を過ごした仙台での思い出が一番深いようで、背景の違うさまざまな友人を得た公立中学の頃のことをよく話題にされます。その後、幼稚園の先生を目指して日本女子大学児童科に進まりましたが、一年生の時にドイツ語に触れるとたちまちその虜になり、学内外のドイツ語の勉強会に熱心に加わって、卒業後は東京大学の独文学科に学士入学されました。1962年に DAAD（ドイツ学術交流会）の試験に合格し、1963年から1965年までドイツ・チュービンゲン大学に留学して、当時チュービンゲン派民俗学の旗頭だったヘルマン・バウジンガー教授の許で、民俗学を修められました。帰国後は東京工業大学の語学ラボラトリーで助手になられ、1968年からは本学の非常勤講師も務められた後、1971年にドイツ語の専任として赴任されました。

当時、ドイツへの留学は、東南アジアやヨーロッパの諸国に次々と寄港して見聞を深めながら、1ヵ月余りをかけてのんびりと船で行くという時代でした。留学中には、ドイツ国内はもちろん、イタリアをはじめとしてヨーロッパ各地を旅行されて、古い歴史と豊かな文化に触れ、その奥行きの高さと広がり感動されたとのこと。小高い丘の上のお城、その中にある大学、敬愛する先生、ネッカー河畔のホテル、角の本屋さん、下宿のおばさんなど、おとぎ話のような南ドイツの大学町で過ごされた2年間は、生涯何ものにも代え難い日々であったようです。先生のその後のドイツ行きはすべてチュービンゲンに凝縮され、そこでの友人とのお付き合いも互いの行き来を通して長く続いています。このように、一度評価したもの、気に入ったものへの一途な傾倒は、先生を最も象徴することと言えましょう。

帰国後に訳されたエリス・カウト著『小人のプームックルシリーズ』（評論社 1974年～1979年刊）は全部で5巻になり、決して可愛いばかりではない、悪いいたずらもするコーボルト小人を、日本の子供たちに広く紹介されました。また、先生のご著書である『ドイツ語日常会話』（評論社 1975年刊）はカセットテープ付きで、生きたドイツ語初級会話を分かりやすく学習できる、日本の LL コースブックの先駆けでした。このご本は、留学中の体験を生かした日常会話だけでなく、語法や文化の紹介も盛り込まれた、実地に役立つ多面的なテキストです。言語の実際の運用・機能面を重視するというこのような姿勢は、恩師バウジンガー教授から受け継いだものと言えます。1982年に、故下山峯子先生（本学非常勤講師を11年務められた）と共に、ヘルマン・

バウジンガー著『ことばと社会—さまざまなドイツ語』（三修社）を訳されましたが、そのあとがきにある「ことばはひとりひとり違うものであり、場面ごとに違うものである、というところから出発する」という著者の社会言語学的立場は、浅井先生の語学および語学教育に関する基本的な視点でもあります。

先生の教育方針は、すぐに正解を与えるのではなく、学生が自分の力で学習し、伸びて行くことを期待して待つ、そうなるように時間をかけて導く、というものです。「エレガントな授業」とでも言ったらよいのでしょうか、いつも教室は“静けさ”に満ちていました。私語がなく、ひたすら先へ進み、いつの間にか学生たちはたくさんの宿題や課題をこなしているというふうでした。その一方で、メディアを使った新しい試みを常に前向きに取り入れておられました。学生同士の会話練習の合間に、ビデオ、CD、CD-ROM、インターネットなどのLLの機能を駆使して、ドイツの文化・風土を紹介したり、コンピュータを利用した文法強化のための特別プログラムを採用したりするなど、少しもためらうことなく「時代の先取り」を実践されました。

年長の者は人の先達であるというお考えから、また、人の役に立ちたいというお気持ちから、何につけても「応援するから」と話に耳を傾け、惜しみなくアドバイスや援助をしてくださいました。卒業後ドイツ文学科や言語学の大学院に進んだり、ドイツ語圏へ留学したりする学生たちに対してばかりでなく、私たち助手にも特別に時間を割いて、ドイツ語の手ほどきをしてくださいました。

長年にわたり、LL委員（現視聴覚教育センター運営委員会委員）をなさり、その間に3回、委員長を務められました。ことに1995年の委員長時代は、現代文化学部との組織統合の準備と本格的なマルチメディアLL教室の計画など、LL教育の発展上非常に大事な時期でした。先生はやはり「時代の先取り」とのお考えで大学側との折衝に当たり、視聴覚教育センターの基礎を築き上げるのに尽力されました。また、当時珍しかったチターの演奏会を開いたり、柴田 翔氏（独文学者・作家）や千足伸行氏（美術評論家）の、あるいは若手研究者たちの講演会を開催されたりして、ドイツ文化への関心を喚起するよう努めていらっしゃいました。

先生の人生を思う時、一言、リウマチについて触れない訳にはいかないでしょう。4度の大手術、痛み、発熱、薬による副作用など、この間の闘病生活は筆舌に尽くし難いものです。けれども先生は、進行するこの病に理性的に次々と対処され、痛みや不自由さに対策を練り、少し回復するとそれを非常な喜びとされて、少しも挫けることはありませんでした。先生は私たちによく、「そんなにすたすた歩いてうらやましいわ」と言われましたが、何気なくしている日常の動作のすべてがいかに貴重なものであるかを思い起こさせてくださると同時に、ゆっくり歩くことによって、慌しさの中でつい見過ごしてしまう道端の花の美しさにも気付くことなどを教えていただきました。

先生が定年に3年を残してやむを得ずご退職になりましたことを私たちは残念に思います。しかしそれにも増して、先生とめぐり会い、さまざまな面で導いていただいたこの30年余の日々を、幸せに思っています。